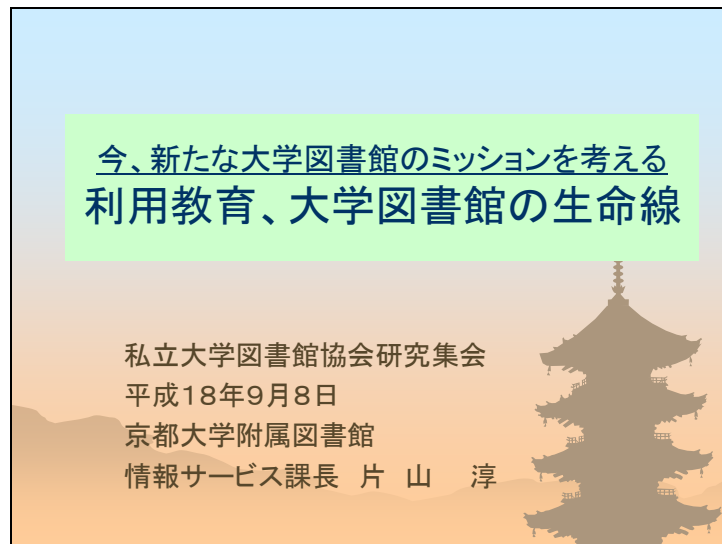
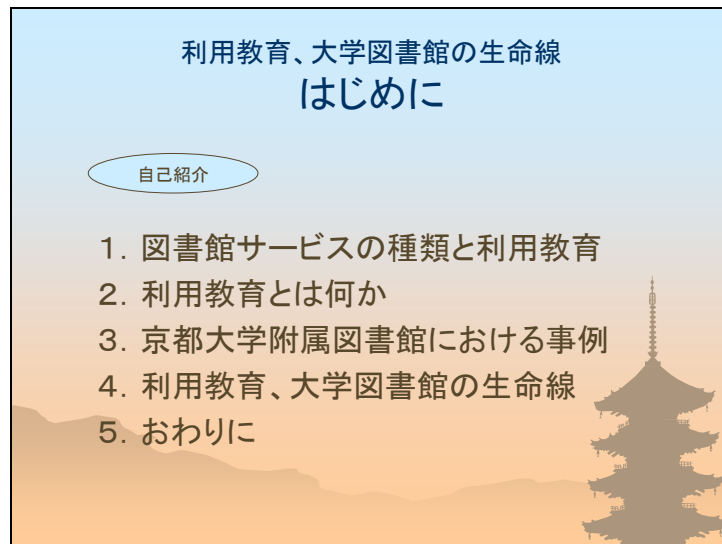


スライド 1



ただいま、ご紹介いただきました京都大学の片山で
ございます。

このような機会を与えていただいた関係者の皆様に
感謝いたします。



いただきましたテーマは、「大学図書館の新しいミッションで、これを利用教育という視点から話す」ということでした。タイトルをどうするかしばし考えました。学術情報基盤は学術研究のライフラインという表現がありましたので、ライフラインを使うことにしましたが、日本語にして「利用教育、大学図書館の生命線」とすることにして、最後に！をつけるか？をつけるかも悩みました。今も、悩んでいます。

話の展開としましては、

1. 図書館サービスの種類と利用教育
2. 利用教育とは何か

3. 京都大学附属図書館における事例

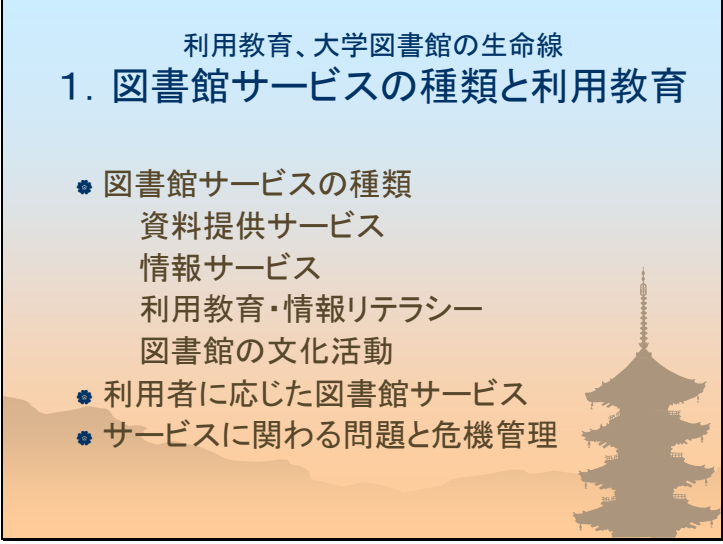
4. 利用教育、大学図書館の生命線

そして、最後に、簡単なまとめという構成ですが、果たして話の最後は！か？か、どの形にできるでしょうか。最後まで、おつきあい願いたいと思います。

利用教育、大学図書館の生命線

1. 図書館サービスの種類と利用教育

- 図書館サービスの種類
 - 資料提供サービス
 - 情報サービス
 - 利用教育・情報リテラシー
 - 図書館の文化活動
- 利用者に応じた図書館サービス
- サービスに関わる問題と危機管理



さて、話の最初に図書館サービスの種類について整理しておきたいと思います。

資料提供サービス、情報提供サービス、利用教育や情報リテラシーを含む利用(者)教育、それと図書館の文化活動を上げました。いずれも、利用者の支援を行うサービス活動と言えます。

資料提供サービスは、閲覧・貸出・案内・複写・リクエスト・予約・レフェラル・レファレンスなどのサービスが構築されています。

情報提供サービスは、電子化された情報(電子ジャーナル、文献情報データベース、所在情報)の提供(これはNIIをバックボーンとして各大学で財政基盤の確立に苦慮しながら提供しています)、それと資料提供に係るサービスのオンライン化によるサービスの構築・提供が進んでいますし、情報発信系の拠点整備が進みつつあり、電子図書館、学術情報ポータル、機関リポジトリなどがキーワードとなっています。

利用教育・情報リテラシー、つまり利用(者)教育は、英語で **Library Use(r) Education** そして **Information Literacy** が該当します。図書館のサービス活動の支援です。

2000年の高等教育の在り方に関する答申「グローバル化時代に求められる高等教育の在り方について

て」では、「情報リテラシーの向上」が一つの項目として取り上げられ重要な位置付けがなされています。

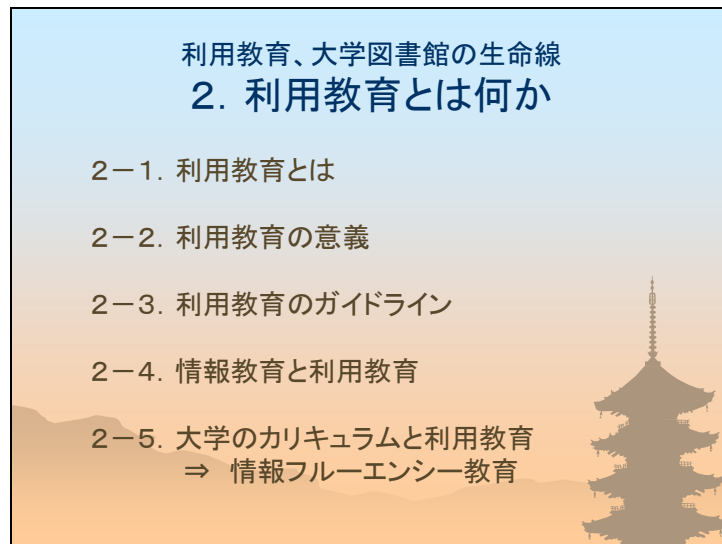
2005年の「新時代の大学院教育(中間報告)」には、電子化時代の魅力ある大学院教育の方法として「Project Based Learning」が明記されており、プロジェクトとしての課題解決学習が重視されています。

サービスの種類と言うよりは図書館の活動という意味で「文化活動」と書きましたが、広報、展示、行事・集会、アウトリーチ(手を差しのばす)など利用者とのコミュニケーションの機会を提供する活動も種類としました。

これらの図書館サービスは全て、利用者に応じたサービスを提供しています。大学図書館の場合は、学生・院生、教職員、留学生、障害者、大学間交流協定校の学生・院生・教職員、一般市民などに応じた対応が検討されています。

サービスに関わる問題と危機管理ということにも注意を払う必要があります。

京都大学では、昨年環境型セクハラ事件が発生しました。監視をしない自由な雰囲気の見聴覚資料コーナーMedia Commonsの50インチ液晶大画面でAVを4人の男子学生が視聴、近く的女子学生が見るに耐えないとして訴えてきた事件でした。マニュアルに基づくしっかりとした対応が求められた事例です。



図書館サービスの種類について整理してみました。
次に、テーマであります「利用教育」について、どう捉えるかについて、
先ず、「利用教育とは何を指すのか」、
次に、「利用教育の意義」、
そして、「利用教育を具体的に進めるに際して使うことのできるガイドライン」、
さらに、「情報教育と利用教育」の対比を行い、
最後に、「大学のカリキュラムの中での利用教育の位置付け」について、京都大学での事例をお話し

することにしたいと思います。

利用教育、大学図書館の生命線
2-1. 利用教育とは

- Library Use(r) Education
- 図書館にとって「必然的」なもの
- Reference Serviceの一環→利用者サービスの一つ
- 「図書館の使い方」に留まらず「すべての利用者が自立して図書館を含む情報環境を効果的・効率的に活用できるようにするために、体系的・組織的に行われる教育」的なサービス
- 図書館が扱うメディアの多様化・高度化が進み、体系的・組織的「指導プログラム」の必要性が高まってきた



利用者に対して、図書館資料・情報を組織化して提供することを使命としている図書館にとって、「利用教育」は、図書館に求められる必然的なサービスと言えます。これで決まりです。

Reference Serviceの一環としての利用教育から、今や利用者サービスの要と言って良いものになっていると私は思います。ここに書いておりますように、「すべての利用者が自立して、図書館を含む情報環境を効果的・効率的に活用できるようにするために、体系的・組織的に行われる教育的サービス」が

「利用教育」であり、
図書館が扱うメディアの多様化・高度化が進むにつ
れて、体系的・組織的な指導プログラムの必要性が
高まっている。

利用教育、大学図書館の生命線
2-2. 利用教育の意義

- **利用の効率化**: 利用者のニーズに応じた「図書館の使い方」を修得することで資源を活用
- **利用の促進**: 潜在的な利用者に対して、図書館利用の有効性や有用性を周知し、既存の利用者にはさらに活発な図書館利用を促進
- **利用者の育成(skill-up)**: 図書館を使う力(Library Literacy)や情報を使う力(Information Literacy) → 米国では基準が策定され、指針が公表
- **ACRL:Information Literacy Competency Standards for Higher Education 2000**



次に、図書館が「利用教育」をプログラムとして提供する意義について少し考えてみます。

利用の手がのびることによって図書館機能が発揮されることになりますから、利用者は自分の必要に応じてサービスを享受するわけです。

利用者にとって、「利用教育」は、図書館資料・情報・サービスの使い方を修得することで利用の効率化を図る手段となります。

また、図書館利用の有効性や有用性を周知することで、利用の促進・活性化に繋がります。

さらに、利用者の育成を図り、図書館機能を活用する能力(あえ

て言うなら **Library Literacy**)や図書館が扱う情報の組織化、活用する力(**Information Literacy**)が養成できるのです。

米国では、「高等教育における情報リテラシー能力基準」が定められており、情報リテラシーを備えた学生の能力として5つの基準が定められ、米国内の大学図書館では、この基準に基づいた具体的なガイドラインが作成・公表され、運用されています。

利用教育、大学図書館の生命線
2ー3. 利用教育のガイドライン
“Library Orientation” と “Bibliographic Instruction”
日本図書館協会・図書館利用教育委員会
「**図書館利用教育ガイドライン**」2001年3月
* 大学図書館で実施すべき10項目と手順



1. 理念確認、2. 組織確立、3. 現状分析
4. 目的・目標設定、5. 方法・手段設定
6. 財政確立、7. 担当者の採用と研修
8. 施設・設備、教材、広報手段の提供
9. 協力体制の確立、10. 評価の定量化

日本では、2001年3月に「図書館利用教育ガイドライン」が、日本図書館協会・図書館利用教育委員会によってまとめられています。

大学図書館で実施すべき項目と手順について、以下の10項目に関して整理され、実施に移すべき目標・骨格ができました。

1. 理念の確認
2. 組織の確立(取り組み体制の整備)
3. 現状分析
4. 目的・目標設定(明確化)
 - ・図書館の存在、役割、機能を先ず印象づける
 - ・サービス案内

・情報探索法、情報整理法、情報表現法の指導

5. 方法・手段設定

6. 財政確立

7. 担当者の採用と研修

8. 施設・設備、教材、広報手段の提供

9. 協力体制の確立

10. 評価の定量化

利用教育、大学図書館の生命線
2-4. 情報教育と利用教育

- 情報教育の十八年度問題
- 全学共通「情報教育科目」と学部提供の「情報基礎教育科目」のあり方
- 京都大学における全学共通情報教育モデル
- 統一的な科目を設計するのではなく、自由の学風を尊重し、学生の自主的な勉学意欲に応えるために、多様な選択が行えるよう配慮、内容の高度化を図る
- リレー講義による具体的利用教育を実践
→ 全学共通科目「情報探索入門」



では次に利用教育と情報教育との関わりについて「情報教育の十八年度問題」として整理する中で見てみます。

平成18年度は、高等学校の「情報教育」を履修した学生が入学してきました。

これを考慮して京都大学では、全学共通「情報教育科目」と学部提供の「情報基礎教育科目」のあり方について検討が進められ、「全学共通情報教育モデル」が作成されました。

詳しくは、次のスライドの中で説明いたしますが、方針としては「統一的な科目を設計するのではなく、自由の学風を尊重し、学生の自主的な勉学意欲に応えるために、多様な選択が行えるよ

うに配慮し、内容の高度化を図る」こととされています。

図書館が係わっておりますところの全学共通科目「情報探索入門」は、リレー講義による具体的(情報)利用教育を実践している科目と位置付けられています。

利用教育、大学図書館の生命線
2-5. 情報フルーエンシー教育

Fluency 流暢に、流れるように、淀みなく、能弁
* コンピュータやインターネットなどの使い方に関する
教育→→→情報フルーエンシー教育

3本柱 (Skill、Concept、Capability)

- * スキル教育 (情報教育Ⅰ群科目)
- * コンセプト教育 (情報教育Ⅱ群科目)
- * ケーパビリティ教育 (情報教育Ⅲ群科目)

〔出典:「情報フルーエンシー:大学のこれからの『情報教育』」
田中克己教授 (情報学研究科) 共通教育通信 Vol. 5 2005秋〕



平成18年度からの京都大学の情報教育は、「情報フルーエンシー教育」という概念で整理されています。

Fluencyとは、「流暢に、流れるように、淀みなく、能弁」などと訳されますが、情報利用においてFluencyであることを目標に、コンピュータリテラシー教育をさらに高度化したSkill教育、情報に関する基礎概念や仕組みに関するConcept教育、情報の利活用能力・情報技術による問題解決能力を養成するためのCapability教育という3本柱を立てて、情報教育のカテゴリー分けを行い、公表して学内外の評価に資することになっているようです。

Skill教育は、操作を主とする科目で、従来のコンピュータリテラシー的な

How to を中心とした科目となっています。

Concept教育は、コンピュータサイエンスにおける基礎科目、情報社会へのインパクト、情報分野における知財論、情報セキュリティ、メディア論などの科目が該当します。

Capability教育は、問題解決を行える実践的な能力の養成を目的とする科目となっており、課題解決のための調査、モデリング、シミュレーション、プログラミング、コンテンツ作成などを主とする科目で、演習中心のものが該当します。「情報探索入門」はCapability教育に該当します。

利用教育、大学図書館の生命線

3. 京都大学附属図書館の事例

- ガイダンス(新入生)(総合人間学部、附属図書館)
- 図書館オリエンテーション
- 3-1. 全学共通科目「情報探索入門」
- 論文・レポートを書くための文献収集講座
- Workshop(随時、各種データベース、e-J)
- On Demand 講習会(キャンパス毎)
- 3-2. 医学情報の探し方(授業の中で)
- 教育学研究科社会人専修コース
「教育人間政策論」



では、京都大学における事例を紹介したいと思います。

1. 新入生向けのガイダンス(毎年4月初旬:18年度30分ずつ3日間)

総合人間学部+附属図書館参考調査掛で担当:新入生全て

2. 図書館オリエンテーション(毎年4月第二週5日間:約400名参加)

附属図書館のオリエンテーション:昼休みの30分:AVホール

3. 全学共通科目「情報探索入門」→→→後ほど詳述します

4. 論文・レポートを書くための文献収集講座(6月末3回:約200名)

人文社会系と自然科学系に分けて実施

5. Workshopを随時開催(OPAC、データベース、e-J など)

4月第3週～7月第2週まで、OPAC週2回、その他週1回

6. On-Demand講習会

Sci-Finder講習会(本部、南部、桂、宇治)など

7. 部局図書館・室での取り組み

医学研究科(授業の中で):後に詳述

教育学研究科(社会人専修コースの5コマ):後に詳述

利用教育、大学図書館の生命線
3-1. 全学共通科目「情報探索入門」

- 提供部局：附属図書館（代表者：川崎良孝教授）
- 図書館長以外に5名の教員によるリレー講義
- 学内の図書館職員（企画担当は参考調査掛、20名近くの図書館職員）による演習
- 演習は講義担当の教員と図書館職員の協力で実施（教員1名に対して3～4名の職員）
- 演習毎に課題を出し学生はその課題の一つについてレポートを提出→→→評価材料
- テキスト：レファレンス事例集「access.txt：文献調査・利用ガイド」（Version 7）
- 講義録「大学生と『情報の活用』：情報探索入門」（増補版）日本図書館協会



平成10年3月 電子図書館システム：サービス開始

レファレンス事例集「access.txt：文献調査・利用ガイド」第1版

参考調査掛の事例集として刊行

平成10年4月 「情報探索入門」提供開始、2回生中心、金曜日5限

第1回(4月13日(金))：総長特別講義で開講：300名以上

最終回の13回目に採ったアンケートは64名から回収

100～150名程度の予想 端末台数110台×2＝220名

平成11年度 227 Ⅰ94

12 285 Ⅰ142

13 140 Ⅰ64

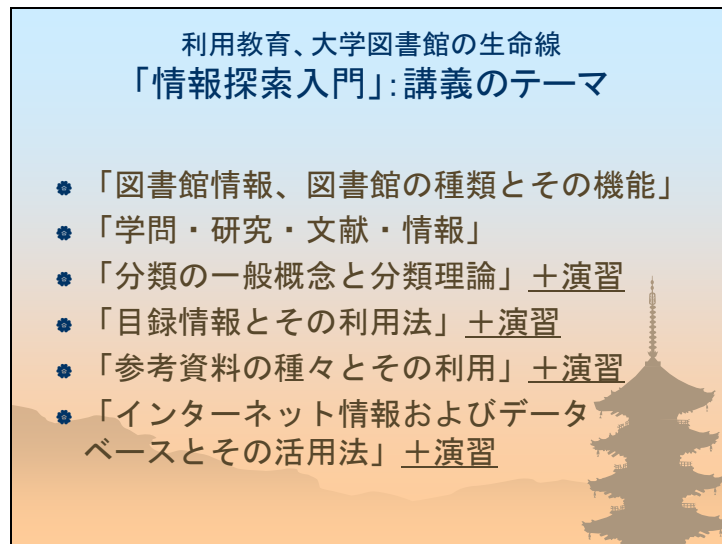
14 170 Ⅰ69

15 117 Ⅰ41

16 88 Ⅰ28

17	151	工69	対象を拡げる:1回生も可能に
18	107	工47	同上、金曜日3限に変更

平成18年度 レファレンス事例集「**access.txt**: 文献調査・利用ガイド」第8版は
未刊行、1枚ものの“Reference Guide”に変更、オンライン版も



講義の目的とするところと内容の概要

館長(第1回) 講義の全体像と図書館の利用方法を理解する

図書館機構、利用の概略イメージを把握する。セキュリティ、情報倫理。

教育(第2回) DB、新聞記事、ヒアリングで得た情報を研究成果に結びつける手法
を理解する

資料批判の方法について「八月十五日の神話」(ちくま新書)で考察

情報(第3回) 知的世界の分類、体系化に関する知識を理解する

分類の概念を説明し、NDCなどの分類理論を紹介

教育(第5回) 目録の歴史と現在の到達点を学び、京大OPAC検索の基礎を知る

図書の配列、探し方を、目録を中心に据えて歴史的展開を理解する

合わせて、京大の図書館資料の探索法の基礎を知る

総人(第7回) 参考資料を活用し、知的情報収集法とその重要性を理解

先行研究を調査する必要性とその方法を理解してゆく上で、レファレンス
ツールの種類・特徴・使用法を覚える

薬学(第10回) インターネットやデータベースの現状を理解し、得られる情報の効
用や特性について述べることができる

学術研究の最先端で起こっている情報革命と研究スタイルへの影響を理解
する。また、電子メディアによる学術情報の流通で起こる問題点を理解する

利用教育、大学図書館の生命線
「情報探索入門」: 講義に対応した演習の内容

- ・「分類の一般概念と分類理論（演習１）」
本の分類とWebページの分類（リンク集の作成まで）
- ・「目録情報とその利用（演習１）」
文献と情報の所在を突き止める：演習課題集
- ・「参考資料の種々とその利用（演習２）」
基礎的な参考図書の概説と参考図書室で実際の演習
- ・「インターネット情報およびデータベースとその活用法（演習２）」
基本問題（２）と応用問題（１）から三課題を選んでインターネットから情報を収集してレポートを作成する



分類演習

分類の実践(図書・ウェブページ)や既存の分類法との比較・考察を行い、分類に関する理解を深める

目録演習

図書館資料の所蔵調査ができる。

参考演習1

図書館のレファレンスコーナーで専門百科事典類を中心とする参考図書を用いて、基礎文献を調査し、その所在書庫を確認する

参考演習2

信憑性の高い電子データベースで学術雑誌記事を調査し、その内容の入手法まで確認する

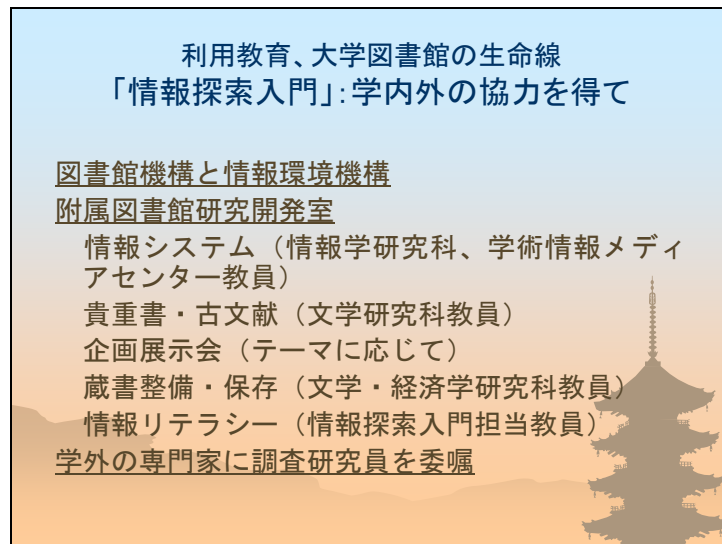
インターネット演習1

提示される課題について、複数の検索方法を比較しつつ、インターネットから情

報を収集し、その特性を考察する

インターネット演習2

研究者の研究業績を調べる課題を通じて、研究業績データベースの操作を体得し、さらにその特性を考察する



全学的な問題を協議する機構→→→6つの機構

高等教育研究開発推進、環境安全保健、国際イノベーション、国際交流推進

図書館機構と情報環境機構の連携による事業の推進

・教育用コンピュータシステムと図書館システムの共同リプレイス

端末: サテライト(9学部端末室＋共通教育＋メセ南館)

OSL(総合人間学部図書館＋附属図書館＋メセ南館)

図書館システムの業務端末

研究開発室

・図書館経営全般

・情報システム: 電子ジャーナル認証システム、デジタルコンテンツの評価等

・貴重書・古文献: 貴重書指定推薦・解説、デジタルコンテンツの評価等

・企画展示会: 平成17年度「学術情報基盤の未来を考える」

・蔵書整備・保存

- ・情報リテラシー

調査研究員

- ・経営分析のための評価・調査等
- ・製本、資料補修、資料保存、書誌解題等

**利用教育、大学図書館の生命線
「情報探索入門」：受講者アンケート**

【平成11～16年度】
履修登録者数(学部別、学年別)、講義の内容、演習の内容、
取り上げたテーマについて、受講して役立ったと思うか、
期待する内容であったか、補助者が役に立ったか、
補助者の人数について、この講義を友人・後輩に薦めるか

【平成17年度】
最終講義で依頼できず、メールで依頼したため受講生の約30%の回収率

【平成18年度】 月曜日5限→→→金曜日3限へ移動
様式変更し評価に点数制を採用。講義ごとにアンケート。質問を受け付け。
HPから回答を出す。詳細な分析・評価を行う予定。
<http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/modules/tinyd2/index.php?id=6>



平成11年度から16年度までのデータで見ると

- ・受講して役立ったと思うか

「役に立った」「やや役に立った」 9割を越えていた

- ・この講義を友人・後輩に薦めるか

「薦める」 6割を越えていた

平成17年度

- ・受講生の30%の回収率なので参考にできない

平成18年度

- ・アンケートの評価欄の変更
- ・講義毎のアンケートに変更
- ・質問を受けて **HP** から回答
- ・詳細な分析・評価を行う予定

利用教育、大学図書館の生命線	
3-2. 医学情報の探し方(授業の中で)	
3-4月	「図書館の利用について」 医員・研修医オリエンテーション
4月	「OPACの使い方」 講習会
	「課題解決学習: 学術情報の収集: 医学・生物系の情報検索」ナノメディン融合教育ユニット、選択科目 Problem Based Learning
4-5月	「文献検索評価法」(社会健康医学基礎スキル) 社会健康医学系専攻専門職学位課程、選択科目
	「医療情報リテラシー」医学科1回生、必修
5月	「医科学研究」医科学専攻修士課程1回生、必修科目
6月	「オンラインジャーナルの使い方講習会」
	「SciFinder Scholar講習会」
	「医学文献の探し方」基礎編(奨励授業)保健学科1回生
7月	「UpToDate講習会」
10月	「D医療情報学(→医療情報リテラシー)」医学科3回生、必修
	「Scopus講習会」
	「医学文献の探し方」(奨励授業)保健学科3回生
11月	「PubMed講習会」
12月	「Web of Science & Derwent Innovations Index」
1月	「効果的な文献検索結果の活用—EndNote利用—講習会」

授業の一コマを使った情報リテラシー支援事業

医学科1回生 「医療情報リテラシー」 必修

保健学科1回生 「医学文献の探し方(基礎編)」奨励授業

医学科3回生 「D 医療情報学」 必修

保健学科3回生 「医学文献の探し方(基礎編)」奨励授業

医科学専攻修士課程1回生 「医科学研究」 必修

社会健康医学系専門職学位課程 「文献検索評価法」 選択科目

ナノメディン融合教育ユニット 「課題解決学習: 学術情報の収集:

医学・生物系の情報検索」

SciFinder、Scopus、WoS + Derwent、EndNote、PubMed

UpToDate(診断・治療・予防に関する臨床支援ツール)年3回更新

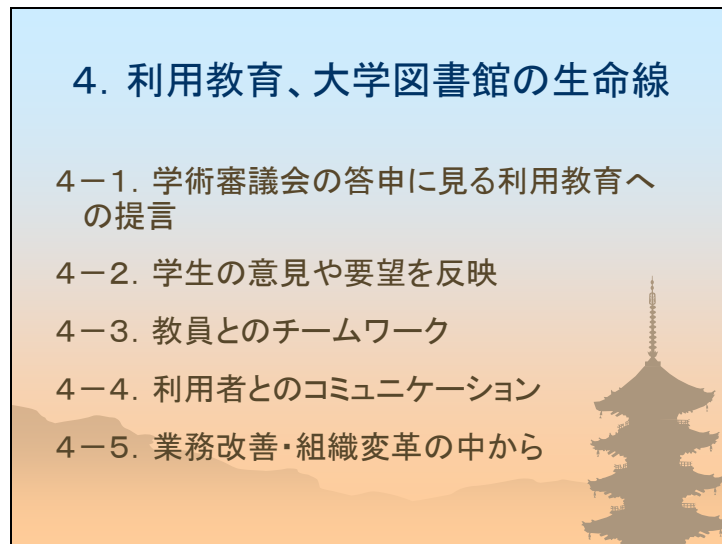
教育学研究科「教育人間政策論」

社会人大学院課程・専修コース共通演習 A

特別講義(2コマ)

文献・資料検索・図書館マネジメント(5コマ)

国の教育政策動向(5コマ)



新しいミッションとして掲げました標題は、学術情報基盤の向こうを張って、「利用教育、大学図書館の生命線」です。利用教育を、大学図書館のライフラインに、いや、できれば、大学のライフラインにしたいという願望を込めた表現です。多くの図書館職員は、利用教育を大学図書館のライフラインと考えていると私は思っています。

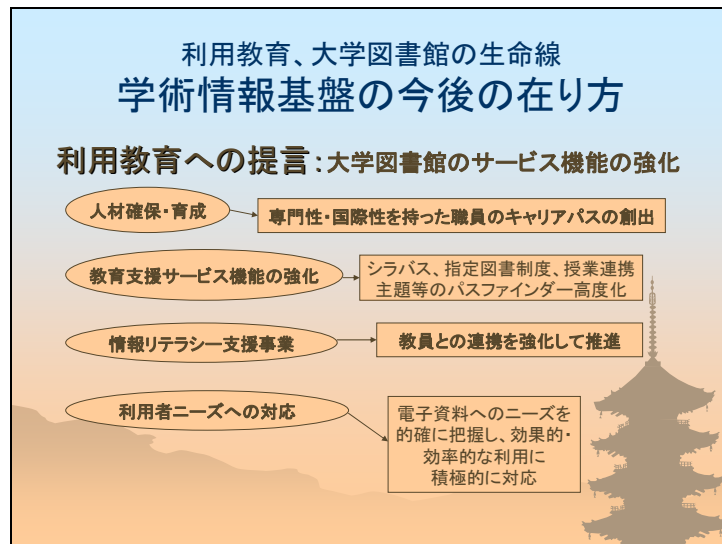
そこに導くために、

1. 3月23日に出ました学術審議会答申の中での提言
2. 学生の意見や要望を反映して
3. 教員とのチームワーク

4. 利用者とのコミュニケーション

5. 業務改善及び組織変革の中から

という流れで、京都大学における現状を見つつライフラインとして取り組んでいるかどうか、自らの反省の中でみてみたいと思います。



3月23日に出された「学術審議会答申」の中で「利用教育」に対してどのように提言されているかですが、以下のとおりです。

1. 大学図書館の戦略的な位置付け(全学理解、財政基盤、共通経費化)
2. 電子化への積極的対応(機関リポジトリ、大学の特色に応じた電子化推進、電子情報の脆弱性・不安定性への対応など)
3. 今後強化すべき機能(紙媒体と電子媒体資料の有機的な連携、狭隘化対策、ニーズに応える自動化装置導入など)
4. 大学図書館の基盤となる目録所在情報サービスの枠組みの強化

⑤. 大学図書館のサービス機能の強化(人材確保・育成面では、専門性を持った職員のキャリアパスの創出、教育支援サービス機能の充実、教員との連携を強化した情報リテラシー支援事業の推進、利用者ニーズへの対応など)

6. 大学図書館と社会・地域との連携の推進(地域社会・産業界との連携・交流の強化、館種や国境を越えた協力など)

利用教育、大学図書館の生命線
学生の意見や要望を反映して

- 京都大学学生生活白書(2年に1回の実態調査)
平成17年:約20%の学生「附属図書館をよく使う」
20%を超える学生が「学部図書館・室をよく使う」
- 「Campus Meeting」(学部・研究所・センターで)
- 「キャンパス討論会」(離れた地区で)

⇔⇔⇔

- コミュニケーションの場を設定
- 学生の意見や要望を図書館運営に
反映し、参加意識を醸成



利用者ニーズの把握という点から主たる利用者である学生の意見や要望について、それをどのように把握して、図書館活動に反映するかという観点で、道筋を付けておく必要があります。

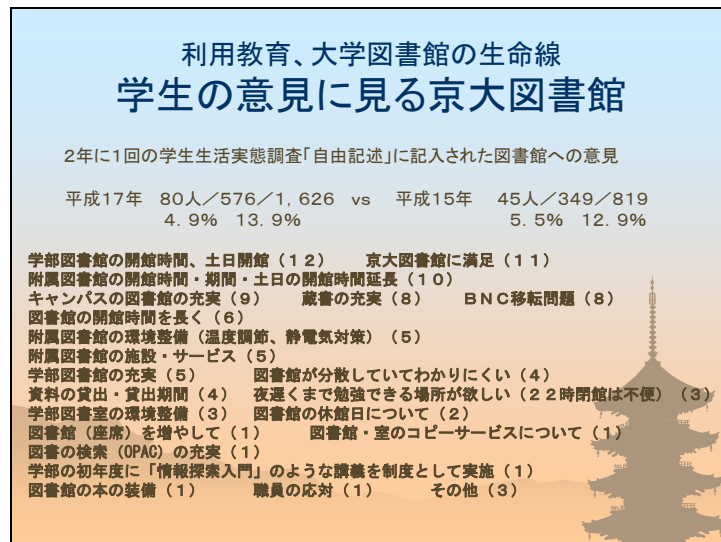
京都大学では、昭和28年から2年に1回「学生生活実態調査」を実施。学生部が実施している調査。平成15年は無作為に抽出した1,850人に依頼、819人から回答、平成17年は2,924人に依頼、1,622人から回答。回収率は、平成15年で44%、平成17年で55%。調査時期は同年度の11月です。

調査項目に、「学内施設の利用」があり、別紙の表。

「ほとんど毎日利用」、「週に2～3回利用」を「高頻度利用」と見

なすと、附属図書館は19.2%、学部図書館・室は22.8%となっています。生協食堂と購買部はともに約70%となっており、それに較べると低く図書館は20%程度の数字です。

この他に、総長が出かけて入って学生と話をする「Campus Meeting」や、図書館で昨年実施した「キャンパス討論会」など工夫してコミュニケーションの場を設置し、大学(図書館)の運営に学生の意見や要望を反映し、参加意識を醸成する工夫を行っている。



次にこれは、先ほどの「学生生活実態調査」の中には、「自由記述」がありますが、そこに記入された意見が「京都大学学生生活白書(別冊)(自由記述編)」としてまとめられ公表されていますので、それから、図書館に関する記述だけを拾い、集計してみました。

これによると、22%を越える学生が「よく行く施設」としていた「学部図書館・室」のしかも「開館時間、土日開館」への意見が12名で最も多くなりました。次に11名が書いていたのが、「京大図書館に満足」という意見です。そして、3番目に、「附属図書館」の「開館時間、土日開館」への意見という順序でした。「図書

館が分散していてわかりにくい」「附属図書館と学部図書館・室で図書館の休館日をずらして」などは京都大学の特徴が出ているような気がします。

中で、「学部の初年度に「情報探索入門」のような講義を制度として実施してほしい」とあった点は、利用教育の観点を考える上で主催者としては嬉しい反応でした。

**利用教育、大学図書館の生命線
教員とのチームワークで**

- **機関リポジトリ** 京都大学学術情報リポジトリ(試験公開約9,000件)
 コンテンツ: 工学研究科の研究成果(約6,000)
 貴重資料画像データ(約3,000)
- **OCW(OpenCourseWare) 46科目(7月1日現在)**
総合人間学部5(シミュレーション概論、連続体力学、計算理学基礎理論、熱力学、統計物理学)、**医学部1**(臓器移植)、**薬学部1**(臨床薬理学)、**工学部6**(物理工学・基礎情報処理、情報学・画像処理論、同・コンパイラ、同・アルゴリズムとデータ構造入門、電気電子工学・自動制御工学、同・知能型システム論)、**農学部5**(応用微生物学実験、生物有機化学Ⅰ、造園学実習Ⅱ、コンピュータ利用と森林科学、農業の新戦略)、**経済学研究科2**(ITビジネスマネジメント、マネジメントコミュニケーション)、**理学研究科2**(重長類の進化、非平衡統計)、**医学研究科5**(社会健康医学基礎スキルⅠ:文献検索・評価法、同Ⅱ:研究デザイン法、疫学コア、医療評価研究、研究プロトコル・研究マネジメント)、**工学研究科2**(電気電子基礎技術の展望、情報メディア工学特論)、**人間・環境学研究科1**(ウイルス多様性科学2)、**情報学研究科1**(電気電子基礎技術の展望)、**全学共通科目15**(国際通貨論、現代の大学・大学生論A、健康科学、現代物理学、*地球環境政策論IB、物理学概論、熱力学、計算理学基礎論、統計物理学、地球環境学のすすめ、環境形成論、*朝鮮・韓国学入門、医療の質と経済・社会・制度、遺伝学、*情報探索入門:図書館とインターネット情報の利用) *リレー講義

次は、「教員とのチームワークで」と書きました。答申の提言にも触れられている古くて新しい普遍的なミッションです。対象としてあげたのは、話題の「機関リポジトリ」と「OCW」です。

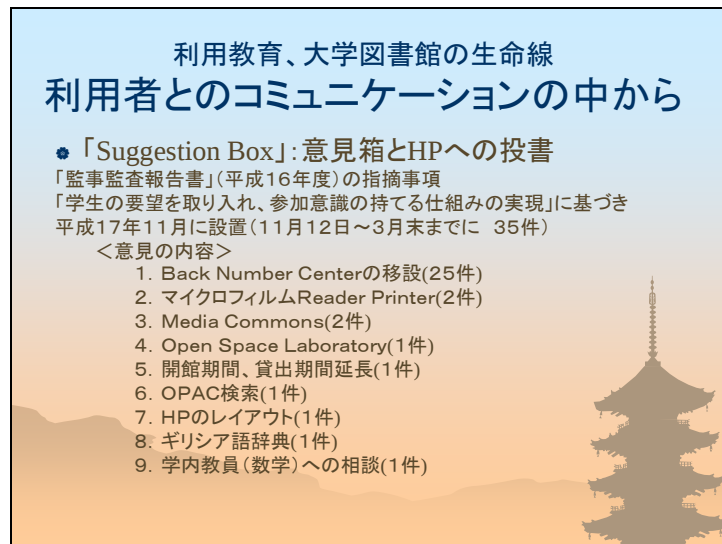
京都大学における「機関リポジトリ」は、平成17年度から検討を開始しました。初年度は、検討体制の整備と、コンテンツとしては、工学研究科が冊子→→CD→→オンラインと媒体を変遷させながら作成してきた毎年度の研究成果「工学研究」が対象。作成担当の工学研究科情報センターと連携してコンテンツ作成に取り組みました。もう一つのコンテンツは電子図書館の「貴重資料画像データ」です。

今年度は、「京都大学数理解析研究所考究録」の登録をメインに、「防災

研究所防災情報データベース」や「経済論叢」などを対象に検討を進めています。Open Archiveに何を登録するか、教員のインセンティブをどのように高めるか、工夫が必要なところです。

リポジトリのコンテンツでもあり得るOpenCourseWareです。7月1日現在の登録状況を記録しました。図書館提供の「情報探索入門」も登録してありますが、概要だけです。PP資料も登録可としてはいるのですが、内容的には未定です。学術情報メディアセンターが管理していますが、センター長は、入力・登録部分は図書館に担当して欲しいと言っています。

いずれも、教員とのチームワークで進めるべき情報発信ということになります。



次に、「利用者とのコミュニケーションの中から」と書きました。

以前から、「投書箱」などの形で運用している図書館も多いでしょうが、京都大学では、平成16年度の「監事監査報告」の中で指摘されている事項「学生の要望を取り入れ、参加意識の持てる仕組みの実現」に基づき発足させたものです。

「Suggestion Box」という名前を付けた窓を設けました。

「学生購入希望図書」や「参考質問」のオンライン申込みなどとともに、京都大学図書館機構の新たなサービスと位置づけて実施

しているところです。

平成17年度の意見はこの一覧のとおりです。

BNC移設に関しては、新たに設置される予定の桂図書館への移設構想についての意見が集中した結果でした。

**利用教育、大学図書館の生命線
業務改善・組織変革の中で**

- **組織：センター化、フラット化、グループ化**
「業務センター」「支援センター」：集中処理による効率化
「フラット化：課長補佐、専門員、掛長」：意思決定の迅速化
「グループ化：利用者支援、貸出・運用」：機動的で柔軟な対応
- **業務改善：簡素化、外注化・派遣、一元化**
18年度以降に実施予定事項：「図書の受入業務等」(一元化)
実施済み事項：「図書の所管換え手続き」
「図書館紹介状発行業務」
「図書館等における貸出・返却、閲覧業務」(簡素化)
「図書館利用者の新規住所登録作業」(一元化)
- **能力開発・研修：職員参加で活発に展開**
【17年度】無線綴じ洋装本の保存と修復、著作権法・個人情報保護法と図書館、NCRおよびAACR2、レファレンスインタビューの技術など
【18年度】会計基準・図書管理規則、図書受入・資産管理、雑誌受入・契約、図書館職員のための接遇マナー、セキュリティ講習会、目録情報の品質管理と書誌作成のポイント、整理技術の最新動向、保存の科学と書庫環境、資料保存実習



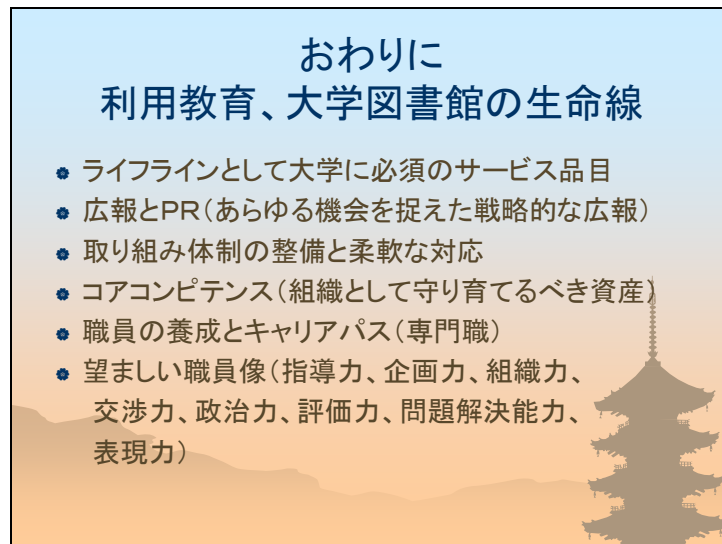
次に、「業務改善・組織変革の中で」と書きました。

法人化後の事務組織改革の特徴を紹介して、利用教育を大学図書館のライフラインにするために行っていることを書きたかったのですが、十分に機能しているわけではございません。

組織変革として図書館で実施していることは、フラット化とグループ化です。図書館専門員を総務課に集めて図書館職員3名とともに、企画・広報グループを作っています。情報サービス課の場合は、参考調査掛と相互利用掛を利用者支援グループとし、資料運用掛と特殊資料掛を一つにして貸出運用グループとしました。意思決定を迅速にするために、課長補佐、専門員、掛長を

統一して専門職員(掛長)として課長に直結する形としました。

一方、職員の能力開発・研修事業については、職員が能力開発・研修企画・立案・実施に参加する方式で取り組みを進め、記録したような企画が実現しました。図書館職員自らが講師をつとめ研鑽を積んでいるところです。



話が雑駁になりましたが、新しい大学図書館のミッションとして言いたかったことを、最後に列挙させていただいてまとめにしたいと思います。

一つは、利用教育をライフラインとして大学に必須のサービス品目とすること

二つは、利用教育のあらゆる機会を捉えた戦略的な広報を展開すること

三つは、利用教育の取り組み体制を整備して柔軟な対応を図ること

四つは、利用教育をコアコンピテンスとして図書館が組織として守り育てる資産として継続すること

五つは、利用教育を担当する職員の養成と専門職としてふさわしいキャリアパスを用意すること

そして、今後、望ましい図書館職員像を示すキーワードとして

指導力(自ら情熱を持ち率先垂範する行動力)

企画力(自ら立志・発意して企画・立案して実行する力)

組織力(社会の変化に敏感で現状に対する問題意識を有し事業を組織する力)

交渉力(図書館経営の感覚を持って関連する機関と交渉する力)

政治力(管理職である館長をサポートする意識で)

評価力(実施した事業を分析し必要な統計を作成して評価する力)

問題解決能力(現状分析に基づいた課題を抽出し解決策を調査し提示する力)

表現力(現状・課題・調査・統計・分析・評価内容について適切に表現する力)

人の言うことを冷静に聞き、積極的に立ち向かう、サービス精神の旺盛な人 が望まれていると申し上げて、拙い話を閉じたいと思います。ご静聴ありがとうございました。